



北の大地では雪解け水が春の到来を知らせる頃、欧州の南部では新緑が香る街路樹が鮮やかに連なっていた。

頬を掠める風が、時折初夏の兆しを匂わせるものの、朝日に包まれた街並みは、爽やかな風を運んでくる。

緩やかな日差しや、清々しいそよ風に交じる小鳥の囀りが、更に爽やかな朝を演出した。

しかし、そんな心地よい朝の陽ざしとは裏腹に、複雑な顔で唸っている者がいた。

そこそこ高級なホテルの一室で、全裸でベッドに座り込んでいた男は、苦々しいため息を吐き出していく。

マシユマロのような白い肌を惜しげもなく晒し、ほどよく筋肉がついた薄い胸板を軽く抑えていた男は、鮮やかな金髪を掻き上げた途端、特徴のある眉気が現れる。

気持ちのいい朝とは、口が裂けても言えないイギリスは、同じベッドで爆睡している男に、淡い緑色の瞳を向けていく。

シートに絡みつくように寝ているのは、クセのある茶髪に少し褐色かがった肌の持ち主だった。

起こさなくても、スペインだと気付いているイギリスは、シートからはみ出している素肌の面積から、彼も全裸なのを理解している。

完全に事情の後なのは推測出来るが、残念ながら、ほとんど記憶が残っていない。

再び苦しいため息を吐き出したイギリスは、正直な感想を脳内

に浮かべた。

『また、やってしまった……』

目が覚めたら隣にスペインがいることも、ここ最近では珍しくなくなってきた。

初めて身体を重ねたのは数世紀も前の話で、最悪な状況下だったが、それも、時代の流れと共に記憶が薄れて久しい。

それ以降も、時折、思い出したように夜を共にする度に、別の感情や意味合いに切り替わっていった。

しかし、恋人でもなければ友人でもなく、セフレでもない。不可思議な関係は、今に始まったことではないが、ここ最近、決まって、前日の酒のせいで、記憶が曖昧な時ばかりだった。

そして、目が覚めた途端、毎度、後悔に苛まれるのだった。

混雑していた思考が徐々に晴れてきたイギリスは、ゆっくりと昨日の記憶を手繰り寄せ始めた。

そして、デザインを重視した室内の調度品を目の端で確認した途端、自分の居場所に確信がもてた。

昨日から世界会議に参加していた事も、今回のホスト国がフランスだと言うことも、難なく思い出せた。

そして、昨夜、数人のメンツで酒を酌み交わしている内に、派手に酔っぱらったことも、次々と蘇ってくる。

しかしながら、酔いが回るにつれ、記憶は断片的になり、どん

な経緯で、この事態になったのかが分からない。

いつも記憶が曖昧すぎて、自ら連れ込んでいるのか、盛り上がったまま雪崩れ込んでくるのかが分からない。

それでも、ここが自分の部屋なのは、壁際に立てかけてあるお気に入りのトランクを見れば、一目瞭然だった。

『合意の上』(多分)が分かれば、今更、問題がない気もする。

何とか詳細を思い起こそうとしても、昨夜の酒が残っているせいで、頭痛が強くなっただけだった。

忌々しい気分のままシーツの端を軽く跳ね上げれば、ふわりと舞い上がったシーツの下から、均整のとれた肉体美が現れ、

自然と目が釘付けになる。

健康的に焼けた肌に、肉付きのいい逞しい胸板と、鍛えられて綺麗に割れた腹筋。

自分と対照的な外見は、いつ見ても惚れ惚れするが、素直に称賛する気にはなれず、舌打ちが漏れる。

唯一似ている瞳の色は、今は閉ざされたままなのが、少し寂しく思えた。

重力に従って、再びスペインの上へ落ちていくシーツを、曖昧に眺めている内に、不意に記憶の断片が脳内を占拠した。

それは、昨夜の濃密な事情の一部で、思わず頬を赤らめたイギリスは、自然と口角が上がるのを止められずにいた。

少し鼻に掛かったスペインの嬌声が脳内に反響し、トクンと胸が跳ね上がると同時に、高揚感が増していく。

しかし、次の瞬間、それら全てを拒否するように頭を強く振ったイギリスだったが、昨夜の行為の決定打だけが残った。

あれこれ考えるのが面倒になり、何気なく時間を確認したイギリスは、予想外の時間に慌て始めた。

「うわあっマジかっつ」

今日も朝から会議がある。遅刻などしようものなら、ホスト国のフランスはもちろん、他のメンツにも何を言われるかわからない。

ベッドから飛び降りたイギリスは、まだ気持ちよさげに寝ているスペインを揺すり起こすように足蹴にした。

「オイ！起きろっ！」

「…んん、…なん？…まだ…ねう」

僅かに身じろぎしながら、むにやむにやと呟いたスペインは、すぐに寝息に戻ってしまい、呆れつつも慣れた様子のイギリスは、再び言葉よりも先に蹴り飛ばしていた。

「さっさと起きろっ！」

遠慮の欠片もなく、何度も尻や背中を蹴っても、一向に起きる気配のない様子に、嘆息を零したイギリスは、諦めて自分の身支度を始めた。

身支度の合間、通りかかる度に軽く蹴り飛ばしたり、叩いたりを繰り返した結果、十数分後にはようやく目を覚ましたようだった。

「さつきから誰やねん！…目え覚めてまうやん…」

大きな欠伸をしながらのっそりと起き上がったスペインは、寝ぼけ眼で周囲を見渡していく。

相変わらずの寝起きの悪さに苦笑したイギリスは、ベッドの脇に落ちていた服を拾い上げた。

そして、まだまだ覚醒しきれしていない頭で、現状把握しようとするスペインに、無情にも叱咤するだけだった。

「時間ないぞ」

問答無用で服を投げつけるイギリスに、不快そうに眉根を寄せたスペインは、威嚇するようにダークグリーンの瞳を向けていく。

しかし、反論する前に時間を確認した瞬間、冷水をぶっ掛けられたように、寝ぼけた頭がクリアになった。

「もう、こんな時間なん？」

文句よりも先に驚愕したスペインが、慌てて着替えを始める中、気付かれないように背を向けたイギリスは、安堵の吐息を漏らしながら、自分の身支度に戻っていく。

そして、数十分後、騒々しくなった室内から、揃って部屋から顔を出した2人は、廊下を仲良くかけこする羽目に陥っていた。

今回の会議メンバーが揃っている会議室は、同じホテルの一角にあった。

移動短縮の配慮も兼ねており、普段から時間にルーズな面々も、周囲の者達に連行されてきている所が多かった。

進行役を任されているドイツは、今日こそはまともに議題を消化させたくて、先ほどから何度も時計を見ていた。

そして、時間厳守と言いたげに開始時間ジャストに席を立ったドイツは、騒がしい室内を見渡すしながら、淡々と言い放った。「時間だ、会議を始める」

それまで、談笑していた面々が、徐々にドイツへ視線を集中させる最中、どうしても空席に目がいく。

「イギリスが遅刻なんて、珍しいよね」

のんびりした口調で呟くイタリヤに、隣に座っていた日本も、同意の意味を込めて頷いた。

普段から遅刻常習犯の者はともかく、いつも最初に来るような性格だからこそ、余計に心配になってくる。

「何かあったのでしょうか？」

端から内緒話する気もないイタリヤと日本に、ドイツも何も言わずに成り行きを眺めているようだった。

この場にいる全員が不在に気付いていたが、2人の会話に言及も助言もなく、からかい混じりの声が飛んでくるだけだった。

「お兄さん知らなくい、その内に来るんじやなくい？」

「ヒーローさえいれば、大丈夫さー」

綺麗に足を組み、椅子の背もたれに全体重をかけているフラ

ンスや、ハンバーガーを加えながら親指を立てるアメリカにも、連絡がないようだった。

しかし、このまま会議を始めるのを躊躇う雰囲気、イタリアが穏やかな口調で呟いた。

「電話してみる？」

それまで黙考をしていた日本は、スーツの内ポケットからスマホを取り出した。

「…そうですね」

出鼻を挫かれた気分ドイツに、申し訳なさに片手で謝罪した日本は、手早くアドレスを開き始めた。

しかし、電話を掛けようとした寸前、ストップをかけたのは、フランスだった。

「心配しなくても、大丈夫だって」

意味深な口調でウインクしてくるフランスに、思わず手を止めた日本に、諦観に満ちたため息がドイツから零れた。

「兄さ…」

言いかけた言葉を咳払いで誤魔化したドイツは、改めてテーブルの端へ視線を向けてから口を開いた。

「兄貴、昨夜一緒に飲んでたんじゃ？何か知らないか？」

「どうせ、寝坊とかじゃねえの？ケセセ」

本来ならば出席メンバーではないが、ホスト国の許可が下りれば顔を見せるプロイセンは、どこか楽しげだった。

そして、同じようにその場にいたフランスも、バカバカしいと言いたげに続けていく。

「ハイハイ、お兄さんも同意見で〜す☆」

きやるんと可愛い子ぶるフランスに、全員の視線が白々しいものに変わっていく中、イタリアはもう一つの空席をチラ見した。

ただの寝坊だと言い切るには、何か理由がありそうだと結論付けようとした時、扉の向こう側から、何かを言い争う声が遠くから響いてきた。

「…お前が、起きねえからだろう！」

「もつと早よ起こしてええやー！」

ドタドタと騒々しい足音に紛れて微かに聞こえてくる声に、その場にいる全員の集中が扉へ注がれていく。

よく聞こうと意識を傾けなくとも、近づいてくる足音と言い争いは、徐々に大きくなっていった。

「はあ？ふつざけんなつ、起こしてやっただろー！」

「あんなん起こした内に入らんわ、ちやんと起こせやつ」

容赦ない言い合いが筒抜け状態になる頃には、このホテルの扉つて、こんなに薄かったつけ？と疑問に思えるレベルだった。

「知るか？！…つつか、もつと速く走れよ、鈍足」

「なんやてつ！誰のせいで腰痛いと思つとんねんつ！」

「なつ…！デカイ声で言うなあ！バカアー！」

ヒートアップする諍いが一際大きく響いた瞬間、察しのいい者達は、遅刻の原因を悟るには十分だった。

そして、思わず吹き出してしまったフランスにつられ、プロイセンやイタリアが笑い声を漏らすものの、日本やカナダは苦笑に近かった。

そして、ドイツが苦いたため息を深々と吐き出した時、会議室の扉が派手な音と共に大きく開け放たれた。

「すまん、お、遅くな…った！」

「ごめくん、寝坊してもくたあ〜」

肩で息を繰り返すイギリスを他所に、涼しい顔をしているスペインは、悪びれもせず笑った。

一見には対照的に見えるのに、並んで立っていると、どこか似ている雰囲気のある2人に、一堂は文句を言う気も失せていた。

「会議を始めたいんだが…」

早く座れとジャスチャーするドイツは、今日のメンバーが少数でよかったと、思うばかりだった。

そして、何もなかったように始まった会議は、いつもと変わらず、意見が出れば出る程、混沌しながら進行していく。

見慣れた風景の中、騒々しく登場した2人は、すっかりいつも通りになっており、話どころか、目を合わせることもなかった。それは、会議中だけでなく、合間の休憩や昼休憩も同じだった。